

【原 著】

小中学校における学級集団の状態像と友人グループとの関連の検討 —学級類型の変容と友人グループタイプの変容から—

武蔵 由佳* 河村 茂雄**

本研究では、児童生徒の友人グループの状態に対する認知と学級集団との関連性を検討することを目的とした。具体的には、学級内の人間関係にまだ広がりはないが学級集団の雰囲気などはある程度形成され始める1学期の学級状態と、日常の学習活動やいくつかの行事などを経て学級集団の雰囲気がある程度確立している2学期の学級状態において、どのようなグループタイプが多く出現するのかについて検討した。公立小学校6校の小学生1,261名と公立中学校4校の中学生1,083名を対象とした。結果、小中学校ともに、1学期でも2学期でも時期に関係なく親和型学級になっている場合は肯定優位型(HL)が多く、荒れ始め型は2学期に否定優位型(LH)の出現率が高まるなど、学級集団の状態と児童生徒の友人グループ関係が相互に関連していることが明らかになった。

キーワード：友人グループ、学級集団、小学生、中学生

【問題と目的】

文部科学省(2013)は、中学時代の不登校経験者(2006年度に「学校嫌い」を理由に30日以上欠席し、中学を卒業した男女約4万1千人が対象。有効回答は約1600人)に対する卒業から5年後の追跡調査で、不登校になったきっかけをたずねたところ、「友人関係」が最多の52.9%であることを明らかにした。これは文部科学省(2001)の前回調査(1993年度に「学校嫌い」を理由に30日以上欠席し、中学を卒業した男女約2万5千人が対象。有効回答は約1300人)の44.5%より8.4%増加していることになる。このことは、児童期、青年期の発達課題のひとつである友人関係がうまくいかないことが、児童生徒の一生の問題に至る深刻な状況を生み出す可能性があることを示していると考えられる。

児童生徒の友人関係には二者関係のみでなく、複数のメンバーで構成されるグループがあげられる。児童生徒が普段よく一緒に遊ぶ相手として「同じクラスの

友人」と回答する割合が小学生で84.5%、中学生で70.7%と最も高い(厚生労働省, 2009)、中学生の友人グループへの所属は90%程度と高い(幸本, 2009; 武内, 1993)、友人グループは同じクラス内で構成される(小学生男子の84.5%、女子の87.9%、中学生男子の60.5%、女子の66.1%)、などが指摘されている(藤田・伊藤・坂口, 1996)。このような実態から、児童生徒の友人関係は、同じクラス内の友人メンバーおよびグループとの関わりが主であり、学級を基盤として形成され则认为される。さらに、武蔵・河村(2015)は、学級内で、児童生徒が所属しているグループの関係性をどのように認知しているかを明らかにし、アンビバレント型、肯定優位型、否定優位型、消極型の4タイプで捉え、グループへの所属理由、志向性、不安感や孤立感との関連について検討した。結果、肯定優位型は被侵害や孤立感や不安感が最も低い良好な関係性を示し、否定優位型はグループ内に相互侵害があり、グループのメンバーの関係性が良好でなかった。さらに、消極型はグループに所属していてもメンバーとの関わりが薄く、アンビバレント型はグループの中で嫌なことがあるにもかかわらず、拒否不安が高くグループを抜けて一人になることを恐れる傾向があることが

* 盛岡大学

** 早稲田大学教育・総合科学学術院

明らかになった。このように児童生徒が、所属するグループをどのように認知しているかにより心性は異なり、これが個人の学級生活や活動の様々な側面に影響を与える（河村、2010）と考えられる。

友人関係と学級活動との関連について、黒川・吉田（2009）は、小学校5、6年生を対象に、授業の班活動における仲間の効果と個人の集団透過性の効果を検討した。仲間が同じ班にいる場合はいない場合よりも、また個人の集団透過性が高い児童の方が低い児童よりも、学習活動は明るく優しい雰囲気のもとで行われ、さらに班成員から受けるサポートは多いことが示された。さらに、黒川・吉田（2006）は、学級内の仲間集団内における個人と集団の他成員との双方向による役割期待遂行度が、関係満足度に与える影響を検討した。男子および小集団では、個人と集団の他成員が一致して重要と捉える役割期待領域が多くなり、女子および大集団では重要性の一致した役割期待項目において、個人が他の集団成員の期待に応えることで、高い関係満足度を得ていることを示している。中谷（2002）は、児童の教室における規範やルールを守る責任ある行動や、友人に対する思いやりのある行動は、クラスメイトにとって対人関係を築く上で好意的に認知されるものであり、そのため友人からの受け入れを促進していると指摘している。したがって、友人関係が個人の学習活動への意欲の向上や、役割期待遂行度の向上、規範に添う行動頻度の増加、愛他性の高まりなどに影響を与え、さらにそのような経験をした個人が増加することで学級集団全体がより活性化することも示唆された。

このことを先に示したグループタイプから具体的に考えると、肯定優位型の個人の増加により学級集団の相互作用が活性化すると考えられる。一方で消極型は、友人グループと関わろうとする欲求が喚起されておらず、他者と良好な関係を形成するためのスキルも不足しているため、このグループタイプが多くなると、学級活動や学習活動が低調になってしまうことが予想される。また、アンビバレント型は、他者と関わろうとする意欲は高いが、対人トラブルが多く発生し、他の児童生徒に攻撃的に反応する行動が予測される。否定

優位型も同様に、学級活動や学習活動において様々なトラブルにまきこまれる可能性があると考えられる（武蔵・河村、2015）。

このように児童生徒は、学級という公的集団と友人グループという私的集団の両方に所属しながら、個人の思考や態度、価値観や規範を形成したり、学習を活性化させたりと、両者の影響を多分に受ける。実際に河村・武蔵（2008a, 2008b）は220学級を対象にして学級集団の状態を独立変数として取り上げ、児童生徒が学級生活に充実感を持ち、児童生徒間に一定のルールと良好な人間関係であるリレーションが同時に確立している「親和的な学級（親和型学級）」では、児童生徒の学級生活に対する充実感に大きな差異が見られ、児童生徒相互のリレーションの確立が不十分な「かたさのある学級（かたさ型学級・管理型学級）」や、ルールの確立が不十分な「ゆるみのある学級（ゆるみ型学級・なれあい型学級）」と比較して、有意にいじめの発生数が少なく、かつ、児童生徒の学習の定着率が高いことを明らかにしている。したがって、教育的効果の高い学級集団の状態像とその学級に所属している児童生徒の友人グループタイプには関連があることが予想される。ただし、これらの関連について実証的に検討している研究はこれまでになく、この視点が明らかになれば、学級集団の様相および友人グループの育成の視点がより明確になり、教師の教育実践の参考になると考えられる。

したがって本研究では、児童生徒の友人グループの関係性に対する認知と学級集団との関連性を検討することを目的とする。具体的には、学級内の人間関係にまだ広がりはないが学級集団の雰囲気などはある程度形成され始める1学期の学級状態と、日常の学習活動やいくつかの行事などを経て学級集団の雰囲気がある程度確立している2学期の学級状態において、どのようなグループタイプが多く出現するのかについて検討する。

【方法】

調査時期 2013年6月（Time 1）、11月（Time 2）。

調査対象 公立小学校6校の小学生1261名（4年生男子183名、女子160名、5年生男子219名、女子223名、6年生男子246名、女子230名）と、公立中学校4校の中学生1083名（1年生男子179名、女子152名、2年生男子160名、女子160名、3年生男子234名、女子198名）を対象とした。

測定用具

(1) **グループ状態認知尺度**（武蔵・河村，2015）：児童生徒の友人グループの関係性に対する認知を「支援性」、「親密性」、「開示性」の肯定的側面と、「相互侵害」の否定的側面の2側面で測定している。4件法（「1：まったくあてはまらない」から「4：とてもあてはまる」）により回答を求めた。各下位尺度の単純加算により得点化される。さらに、肯定的側面の高低と否定的側面の高低の組み合わせから、グループの関係性をアンビバレント型（HH）、肯定優位型（HL）、否定優位型（LH）、消極型（LL）の4タイプに分類するものである。

(2) **友人グループの人数**：普段一緒にいるような友人グループの人数については、“休み時間や放課後は何人の友達とすごしていますか？”の質問に対する回答を“8人より多い”“6～7人”“4～5人”“2～3人”“1人である”の5つから選択してもらった。

(3) **学級生活満足度尺度**（河村・田上，1997）：学級生活満足度尺度は学校生活における適応感を測定する尺度で、承認（小学校6項目、中学校10項目）と被侵害（小学校6項目、中学校10項目）の2因子からなる。小学校は（「1：まったくあてはまらない」から「4：とてもあてはまる」）の4件法、中学校は（「1：まったくあてはまらない」から「5：とてもあてはまる」）の5件法である。各下位尺度の単純加算によって得点化される。下位尺度の全国平均値を基準に、学校生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学校生活不満足群の4群に分類することで、児童生徒の学校適応状態を理解することが可能である。さらに、この4群の出現率を元に学級集団の状態像を類型することが可能である。具体的には、学校生活満足群に多くの児童生徒が出現する「親和型学級」、学校生活満足群と非承認群に多くの児童生徒が出現する「かたさ型学級」、学

校生活満足群と侵害行為認知群に多くの児童生徒が出現する「ゆるみ型学級」、学校生活満足群と学校生活不満足群に多くの児童生徒が出現する「荒れ始め型学級」、学校生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学校生活不満足群の出現率が同程度になっている「拡散型学級」、学校生活不満足群に多くの児童生徒が出現する「崩壊型学級」の6類型である。

調査手続き 各学校長、学年主任、学級担任に承諾を得た上でホームルーム時に集団方式で実施した。調査の実施においては、担任教師より児童生徒に、学校の成績に一切関係がないこと、回答は強制ではなく、回答しなくても不利益を被らないこと、回答後の調査用紙は担任教師やクラスメイトに見られることはないこと、個人のプライバシーは守られることについて伝えるなどの倫理的配慮を行った。また上記内容についてはフェイスシートにも明記した。さらに担任教師には、実施の手順・注意事項のプリントの通りに実施することを依頼し、児童生徒の回答用紙は児童生徒自身に封筒に入れさせ、さらにその場で密封させることとし、児童生徒に余計な不安がかからないように配慮した。

【結果】

1. 学級類型の出現率

6月（Time 1）と11月（Time 2）に実施した学級生活満足度尺度の得点により、小中学校の学級集団の状態を「親和型学級」「かたさ型学級」「ゆるみ型学級」「荒れ始め型学級」「拡散型学級」「崩壊型学級」の6つに分類し、各時期の出現率を算出した。結果、小学校では6月（Time 1）は親和型学級の出現率が42.86%と最も高く、次いでゆるみ型学級が30.61%、荒れ始め型学級が20.41%、かたさ型学級が6.12%であり、拡散型学級と崩壊型学級は出現しなかった。11月（Time 2）は親和型学級の出現率が46.94%と最も高く、次いで荒れ始め型学級が30.61%、ゆるみ型学級が16.33%、かたさ型が学級6.12%であり、拡散型学級と崩壊型学級は出現しなかった。よって、本研究では親和型学級、かたさ型学級、ゆるみ型学級、荒れ始め型学級の4類型で分析をすることにした。また、6月

Table 1 学級類型の出現率<小学校>

Time 2		親和型 学級	かたさ型 学級	ゆるみ型 学級	荒れ始め型 学級	Time 1 計
Time 1						
親和型 学級	学級数	18	0	1	2	21
	学級の出現率 (%)	36.73	0.00	2.04	4.08	42.86
	児童数	456	0	25	55	536
	児童の出現率 (%)	36.19	0.00	1.98	4.37	42.54
かたさ型 学級	学級数	1	1	0	1	3
	学級の出現率 (%)	2.04	2.04	0.00	2.04	6.12
	児童数	27	29	0	21	77
	児童の出現率 (%)	2.14	2.30	0.00	1.67	6.11
ゆるみ型 学級	学級数	4	0	3	8	15
	学級の出現率 (%)	8.16	0.00	6.12	16.33	30.61
	児童数	102	0	79	205	386
	児童の出現率 (%)	8.10	0.00	6.27	16.27	30.63
荒れ始め型 学級	学級数	0	2	4	4	10
	学級の出現率 (%)	0.00	4.08	8.16	8.16	20.41
	児童数	0	57	102	102	261
	児童の出現率 (%)	0.00	4.52	8.10	8.10	20.71
Time 2 計	学級数	23	3	8	15	49
	学級の出現率 (%)	46.94	6.12	16.33	30.61	100.00
	児童数	585	86	206	383	1260
	児童の出現率 (%)	46.43	6.83	16.35	30.40	100.00

(Time 1) から 11 月 (Time 2) にかけて学級類型がどのように変化したかについて示した (Table 1)。結果、6 月 (Time 1) に親和型であった学級が 11 月 (Time 2) にも親和型であった場合が 36.73% と最も多く、次いで 6 月 (Time 1) にゆるみ型であった学級が 11 月 (Time 2) に荒れ始め型にあった場合が 16.33% と多かった。

中学校では、6 月 (Time 1) は親和型学級の出現率が 43.59% と最も高く、次いで荒れ始め型学級が 38.46%、かたさ型学級が 10.26%、ゆるみ型学級が 7.69% であり、拡散型学級と崩壊型学級は出現しなかった。11 月 (Time 2) は親和型学級の出現率が 41.03% と最も高く、次いで荒れ始め型学級が 28.21%、かたさ型学級が 15.38%、ゆるみ型学級が 15.38% であり、拡散型学級と崩壊型学級は出現しなかった。よって、本研究では小学校と同様に親和型学級、かたさ型学級、ゆるみ型学級、荒れ始め型学級の 4 類型で分析することにした。また、6 月 (Time 1) から 11 月 (Time 2) にかけて学級類型がどのように変化したかについて示した (Table 2)。結果、6 月 (Time 1) に親和型であった学級が 11 月 (Time 2) にも親和型であった場合

が 23.08% と最も多く、次いで 6 月 (Time 1) に荒れ始め型であった学級が 11 月 (Time 2) に親和型になった場合が 15.38% と多かった。

2. グループタイプの抽出とその様相の検討

分析は、6 月 (Time 1)、11 月 (Time 2) の調査のどちらかを欠席している児童生徒、さらに“休み時間や放課後は何人の友達とすごしていますか?” の質問に対する回答に“1人である”と答えた児童生徒は分析対象から外した。結果、公立小学校 6 校の小学生 1206 名 (4 年生男子 170 名、女子 153 名、5 年生男子 213 名、女子 214 名、6 年生男子 238 名、女子 218 名) と、公立中学校 4 校の中学生 1029 名 (1 年生男子 167 名、女子 143 名、2 年生男子 150 名、女子 154 名、3 年生男子 220 名、女子 195 名) を対象とした。各回答の人数と出現率を Table 3 に示す。

グループ内の人間関係を把握するために、各因子の平均値と標準偏差を算出した (Table 4)。また、グループタイプを抽出するために、二次因子分析により肯定的側面 (小学校: 平均値 37.84, 標準偏差 7.57, 中学校: 平均値 38.95, 標準偏差 6.73) 否定的側面 (小

Table 2 学級類型の出現率<中学校>

Time 2		親和型	かたさ型	ゆるみ型	荒れ始め型	Time 1 計
Time 1	学級	学級	学級	学級	学級	
親和型 学級	学級数	9	1	2	5	17
	学級の出現率 (%)	23.08	2.56	5.13	12.82	43.59
	生徒数	252	33	59	140	484
	生徒の出現率 (%)	23.27	3.05	5.45	12.93	44.69
かたさ型 学級	学級数	1	3	0	0	4
	学級の出現率 (%)	2.56	7.69	0.00	0.00	10.26
	生徒数	30	74	0	0	104
	生徒の出現率 (%)	2.77	6.83	0.00	0.00	9.60
ゆるみ型 学級	学級数	0	0	1	2	3
	学級の出現率 (%)	0.00	0.00	2.56	5.13	7.69
	生徒数	0	0	30	56	86
	生徒の出現率 (%)	0.00	0.00	2.77	5.17	7.94
荒れ始め型 学級	学級数	6	2	3	4	15
	学級の出現率 (%)	15.38	5.13	7.69	10.26	38.46
	生徒数	153	34	93	129	409
	生徒の出現率 (%)	14.13	3.14	8.59	11.91	37.77
Time 2 計	学級数	16	6	6	11	39
	学級の出現率 (%)	41.03	15.38	15.38	28.21	100.00
	生徒数	435	141	182	325	1083
	生徒の出現率 (%)	40.17	13.02	16.81	30.01	100.00

Table 3 休み時間や放課後に過ごす友達の数

	小学校				中学校			
	Time 1		Time 2		Time 1		Time 2	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
8人以上	179	80	159	67	140	39	161	57
	28.19	13.16	24.96	11.13	25.18	7.75	29.06	11.31
6～7人	103	63	103	86	99	76	108	69
	16.22	10.36	16.17	14.29	17.81	15.11	19.49	13.69
4～5人	193	208	212	201	203	200	200	193
	30.39	34.21	33.28	33.39	36.51	39.76	36.10	38.29
2～3人	146	234	147	231	95	177	68	173
	22.99	38.49	23.08	38.37	17.09	35.19	12.27	34.33
1人である	14	23	16	17	19	11	17	12
	2.20	3.78	2.51	2.82	3.42	2.19	3.07	2.38
計	635	608	637	602	556	503	554	504
	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

上段：人数，下段：%

学校：平均値 8.88，標準偏差 3.10，中学校：平均値 7.82，標準偏差 2.96) の 2 因子 (因子間相関小学校 $r = -.02$ *n.s.*，中学校 $r = .04$ *n.s.*) の合計点を算出し，平均値をもとに 4 つに分類した。両側面が高いアンビバレント型 (HH)，肯定的側面のみが高い肯定優位型 (HL)，否定的側面のみが高い否定優位型 (LH)，両

側面がともに低い消極型 (LL) が抽出された。

次に，抽出されたグループタイプが 6 月 (Time 1) と 11 月 (Time 2) でどのように変化しているのかについて検討するために，6 月 (Time 1) と 11 月 (Time 2) のグループタイプの出現率に χ^2 乗検定を行った。結果， χ^2 乗値は小学校が 329.04 ($p < .01$ ， $df = 9$)，

Table 4 グループ状態認知尺度の平均値と標準偏差

	小学校		中学校	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
グループ状態認知尺度				
親密性	13.21	(2.80)	13.91	(2.48)
支援性	12.16	(3.19)	12.07	(2.83)
開示性	12.47	(3.21)	12.97	(2.61)
相互侵害	8.88	(3.10)	7.82	(2.96)

Table 5 Time 1 と Time 2 におけるグループタイプの移行<小学校>

Time 1 \ Time 2	アンビバレント型 (HH)	肯定優位型 (HL)	否定優位型 (LH)	消極型 (LL)
アンビバレント型 (HH)	128 8.17 ***	67 -2.09 *	52 -1.61 <i>n.s.</i>	23 -5.13 ***
肯定優位型 (HL)	103 -0.73 <i>n.s.</i>	202 11.46 ***	31 -8.54 ***	54 -3.37 ***
否定優位型 (LH)	58 -1.05 <i>n.s.</i>	24 -7.25 ***	108 9.55 ***	42 -0.56 <i>n.s.</i>
消極型 (LL)	46 -6.04 ***	68 -3.72 ***	85 2.05 *	115 8.97 ***

上段：人数，下段：調整された残差 * $p < .05$ ，*** $p < .001$ 。

Table 6 Time 1 と Time 2 におけるグループタイプの移行<中学校>

Time 1 \ Time 2	アンビバレント型 (HH)	肯定優位型 (HL)	否定優位型 (LH)	消極型 (LL)
アンビバレント型 (HH)	108 8.96 ***	60 -1.72 <i>n.s.</i>	57 -2.77 **	18 -4.59 ***
肯定優位型 (HL)	55 -2.17 *	171 13.01 ***	29 -9.13 ***	39 -2.07 *
否定優位型 (LH)	54 -2.44 *	25 -9.29 ***	174 12.40 ***	44 -1.24 <i>n.s.</i>
消極型 (LL)	22 -4.39 ***	43 -2.39 *	55 -0.81 <i>n.s.</i>	75 8.80 ***

上段：人数，下段：調整された残差 * $p < .05$ ，** $p < .01$ ，*** $p < .001$ 。

中学校が 389.56 ($p < .01$, $df = 9$) であった (Table 5, Table 6)。 χ^2 乗検定の結果を整理すると、小学校では 6 月 (Time 1) と 11 月 (Time 2) とともに同じグループタイプの出現率が高く、消極型 (LL) から否定優位型 (LH) に移行する児童も多く出現した。アンビバレント型 (HH) から肯定優位型 (HL) や消極型 (LL) への移行、肯定優位型 (HL) から否定優位型 (LH)、消極型 (LL) への移行は少なく、否定優位

型 (LH) から肯定優位型 (HL) への移行、消極型 (LL) からアンビバレント型 (HH) や肯定優位型 (HL) への移行も少なかった。中学校でも小学校と同様に 6 月 (Time 1) と 11 月 (Time 2) とともに同じグループタイプの出現率が高かった。また、アンビバレント型 (HH) や肯定優位型 (HL) から否定優位型 (LH) や消極型 (LL) への移行、肯定優位型 (HL) からアンビバレント型 (HH) への移行、否定優位型 (LH)

や消極型 (LL) からアンビバレント型 (HH) や肯定優位型 (HL) への移行も少なかった。

3. 学級類型とグループタイプとの関連

学級類型とグループタイプの関連を検討するために6月 (Time 1) と11月 (Time 2) の出現率に χ^2 乗検定を行った。結果、 χ^2 乗値は6月 (Time 1) が34.03 ($p < .001$, $df = 9$) で、11月 (Time 2) が37.11 ($p < .001$, $df = 9$) であった (Table 7, Table 8)。 χ^2 乗検定の結果を整理すると、小学校では、6月 (Time 1) の親和型学級においては肯定優位型 (HL) の出現率が高く、否定優位型 (LH) の出現率が低かった。また、ゆるみ型学級においてはアンビバレント型 (HH) と否定優位型 (LH) の出現率が高く、肯定優位型 (HL) の出現率が低かった。11月 (Time 2) の親和型学級においても肯定優位型 (HL) の出現率が高く、否定優位型 (LH) の出現率が低かった。また、かたさ型学級と荒れ始め型学級で肯定優位型 (HL) の出現率が低く、荒れ始め型学級では否定優位型 (LH)

の出現率が高かった。

中学校においても学級類型とグループタイプの関連を検討するために6月 (Time 1) と11月 (Time 2) の出現率に χ^2 乗検定を行った。結果、 χ^2 乗値は6月 (Time 1) が24.62 ($p < .01$, $df = 9$) で、11月 (Time 2) が42.22 ($p < .001$, $df = 9$) であった (Table 9, Table 10)。 χ^2 乗検定の結果を整理すると、6月 (Time 1) の親和型学級においては肯定優位型 (HL) の出現率が高く、否定優位型 (LH) の出現率が低かった。また、ゆるみ型学級においては否定優位型 (LH) の出現率が高く、肯定優位型 (HL) の出現率が低かった。さらに荒れ始め型学級で否定優位型 (LH) の出現率が高かった。11月 (Time 2) の親和型学級においても肯定優位型 (HL) の出現率が高く、否定優位型 (LH) の出現率が低かった。また、かたさ型学級では消極型 (LL) の出現率が高かった。ゆるみ型学級と荒れ始め型学級で否定優位型 (LH) の出現率が高かった。

Table 7 学級集団の状態像とグループタイプの関連<小学校・Time 1>

	親和型 学級	かたさ型 学級	ゆるみ型 学級	荒れ始め型 学級
アンビバレント型 (HH)	105	15	97	53
	-1.53 <i>n.s.</i>	-.45 <i>n.s.</i>	2.23 *	-.39 <i>n.s.</i>
肯定優位型 (HL)	199	27	92	72
	3.92 ***	.79 <i>n.s.</i>	-3.57 ***	-1.20 <i>n.s.</i>
否定優位型 (LH)	71	15	91	55
	-4.23 ***	.23 <i>n.s.</i>	3.24 **	1.35 <i>n.s.</i>
消極型 (LL)	143	17	87	67
	1.08 <i>n.s.</i>	-.62 <i>n.s.</i>	-1.22 <i>n.s.</i>	.44 <i>n.s.</i>

上段：人数，下段：調整された残差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

Table 8 学級集団の状態像とグループタイプの関連<小学校・Time 2>

	親和型 学級	かたさ型 学級	ゆるみ型 学級	荒れ始め型 学級
アンビバレント型 (HH)	148	27	53	107
	-1.12 <i>n.s.</i>	1.00 <i>n.s.</i>	-.16 <i>n.s.</i>	.79 <i>n.s.</i>
肯定優位型 (HL)	202	15	58	86
	4.18 ***	-2.45 *	-.01 <i>n.s.</i>	-3.18 **
否定優位型 (LH)	97	21	47	111
	-4.41 ***	.54 <i>n.s.</i>	.49 <i>n.s.</i>	4.10 ***
消極型 (LL)	117	20	36	61
	1.10 <i>n.s.</i>	1.12 <i>n.s.</i>	-.33 <i>n.s.</i>	-1.56 <i>n.s.</i>

上段：人数，下段：調整された残差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

Table 9 学級集団の状態像とグループタイプの連関<中学校・Time 1>

	親和型 学級	かたさ型 学級	ゆるみ型 学級	荒れ始め型 学級
アンビバレント型 (HH)	122	22	19	80
	1.94 <i>n.s.</i>	-.29 <i>n.s.</i>	-.16 <i>n.s.</i>	-1.73 <i>n.s.</i>
肯定優位型 (HL)	148	27	11	108
	2.26 *	-.24 <i>n.s.</i>	-3.22 **	-.37 <i>n.s.</i>
否定優位型 (LH)	109	27	35	126
	-3.33 ***	-.30 <i>n.s.</i>	2.79 **	2.03 *
消極型 (LL)	82	22	18	73
	-.86 <i>n.s.</i>	.93 <i>n.s.</i>	.66 <i>n.s.</i>	-.06 <i>n.s.</i>

上段：人数，下段：調整された残差 * $p < .05$ ，** $p < .01$ ，*** $p < .001$ 。

Table 10 学級集団の状態像とグループタイプの連関<中学校・Time 2>

	親和型 学級	かたさ型 学級	ゆるみ型 学級	荒れ始め型 学級
アンビバレント型 (HH)	98	27	37	77
	.38 <i>n.s.</i>	-.95 <i>n.s.</i>	-.67 <i>n.s.</i>	.84 <i>n.s.</i>
肯定優位型 (HL)	158	30	44	67
	5.41 ***	-1.88 <i>n.s.</i>	-1.20 <i>n.s.</i>	-3.41 <i>n.s.</i>
否定優位型 (LH)	89	46	67	113
	-5.08 ***	.94 <i>n.s.</i>	2.48 *	2.72 **
消極型 (LL)	66	32	26	52
	-.73 <i>n.s.</i>	2.18 *	-.83 <i>n.s.</i>	-.15 <i>n.s.</i>

上段：人数，下段：調整された残差 * $p < .05$ ，** $p < .01$ ，*** $p < .001$ 。

【考察】

1. 学級類型の出現率

学級崩壊は小学校の8.69%（全国連合小学校長会，2006）と指摘されているが，本研究では6月（Time 1），11月（Time 2）ともに崩壊型学級は出現しなかった。ただし，荒れ始め型学級が6月（Time 1）で小学校で20.41%，中学校で38.46%，11月（Time 2）で小学校で30.61%，中学校で28.21%となっており，崩壊に至る可能性の高い学級が存在すると考えられる。年度の早い時期である6月（Time 1）に行われた段階では，前年度に荒れた学級を立て直している学級と今年度すでに荒れ始めている学級とが混在していると考えられるが，年度の中盤の11月（Time 2）で行われた段階では荒れ始め型は小中学校ともに30.00%程度となり，全体としてこの数字は決して少ないとは言えないと考

えられる。一方，親和型学級の出現率が6月（Time 1）は小学校で42.86%，中学校で43.59%，11月（Time 2）は小学校で46.94%，中学校で41.03%と他の類型と比較すると出現率が最も高かった。したがって，調査対象学級の全体をみると学級の状態像は親和型学級と荒れ始め型学級に二極化していると考えられる。次にかたさ型学級は6月（Time 1）は小学校で6.12%，中学校で10.26%，11月（Time 2）は小学校で6.12%，中学校で15.38%であり，ゆるみ型学級は6月（Time 1）は小学校で30.61%，中学校で7.69%，11月（Time 2）は小学校で16.33%，中学校で15.38%であり，小学校と中学校では出現率が異なっていることが明らかになった。かたさ型学級は児童生徒相互のリレーションの確立が不十分であり，ゆるみ型学級はルールの確立が不十分な学級である（河村，2010）。両者は正反対の様相を示すことから，学年当初に担任教師が目指

子どもや集団の姿、教育技術が異なっていることなどが反映されていることも考えられる。以上、学級類型の全体的な出現率の特徴が明らかになった。

次に6月（Time 1）から11月（Time 2）における学級類型の移行についてである。小中学校ともに6月（Time 1）に親和型であった学級が11月（Time 2）にも親和型のまま維持している場合が小学校で36.73%、中学校で23.08%と最も多かった。このことから、年度の早い段階で親和型学級という理想的な状態を形成し、年度の後半までそれを維持することが可能であることが示されたと考えられる。一方、6月（Time 1）に親和型だった学級が11月（Time 2）に他の類型へ移行した場合を見ると、小学校はゆるみ型への移行が2.04%、荒れ始め型への移行が4.08%であり、計6.12%と比較的少ないが、中学校ではかたさ型への移行が2.56%、ゆるみ型への移行が5.13%、荒れ始め型への移行が12.82%であり、計20.51%と多くなっており、中学校の方が学級集団の状態が望ましくない方向へ展開してしまう傾向があることが明らかになった。また小学校ではゆるみ型学級から荒れ始め型学級への移行が16.33%と多いことも明らかになった。したがって、小学校は6月（Time 1）にゆるみ型であった場合の対応が必要であり、中学校は6月（Time 1）に親和型であってもその後の荒れに向かわないような対応が必要となると考えられる。さらに、6月（Time 1）に荒れ始め型だった学級が11月（Time 2）に他の類型へ移行した場合を見ると、小学校はかたさ型が4.08%、ゆるみ型が8.16%と計12.24%、中学校では親和型が15.38%、かたさ型が5.13%、ゆるみ型が7.69%と計28.20%であることが明らかになった。このことは、先にも述べたように、前年度に荒れていた学級や早い段階で荒れ始めた学級を立て直す場合も多くあることを示していると考えられる。よって、学級が望ましくない方向へ展開する割合は小学校で6.12%、中学校で20.51%、さらに学級が望ましい方向へ展開する場合は小学校で12.24%、中学校で計28.20%であり、2倍以上の割合で望ましい方向へ展開していることが示された。

以上より、小中学校ともに6月（Time 1）段階で親

和型学級になり11月（Time 2）まで維持することが可能であるが、一方で一度学級が望ましい状態になったとしても11月（Time 2）に望ましくない方向への変化が起こることも加味して、教師は早急に対策を立て実行することが必要であると考えられる。特に、小学校ではゆるみ型から荒れ始め型への移行、中学校では小学校と比較して学級集団が望ましい方向にも望ましくない方向にもどちらにも移行しやすいことに留意する必要があると考えられる。

2. グループタイプの出現率

小中学校ともに6月（Time 1）と11月（Time 2）が同じグループタイプの出現率が高かった。つまり、学年の始まりの段階など、早い段階で学級集団内において友人グループができると、そのグループの関係性がよくても悪くても、そこに所属しているメンバーとの関わりが1年間継続される場合が多いことを示していると考えられる。ただし、小学校においては、消極型（LL）から否定優位型（LH）に移行する児童も多く出現しており、この変化は学級集団の変化とも関連していると考えられた。つまり、小学校では学級集団がゆるみ型から荒れ始め型へ移行した割合も高く、相互侵害が高まった可能性が考えられる。

次に、その他のグループタイプの移行についてであるが、小中学校ともにアンビバレント型（HH）や肯定優位型（HL）から否定優位型（LH）や消極型（LL）への移行は少なく、一旦肯定的な関係を形成できれば否定的な関係には移行しにくいことが明らかになった。同様に否定優位型（LH）や消極型（LL）から肯定優位型（HL）やアンビバレント型（HH）への移行も少なく、一旦否定的な関係が形成されると肯定的な関係に移行しにくいことが示された。

3. 学級集団の状態像によるグループタイプの出現率

小学校の6月（Time 1）の時点で、親和型学級には肯定優位型（HL）の出現率が高く、否定優位型（LH）の出現率が低いことが明らかになった。また、ゆるみ型の学級集団には、アンビバレント型（HH）と否定優位型（LH）の出現率が高く、肯定優位型（HL）の出現率が低いことが明らかになった。11月（Time 2）では、親和型学級には肯定優位型（HL）の出現率が

高く、否定優位型（LH）の出現率が低いことが明らかになった。かたさ型学級では肯定優位型（HL）の出現率が少なく、荒れ始め型の学級集団では、肯定優位型（HL）の出現率が少なく、否定優位型（LH）の出現率が多くなることが明らかになった。

したがって、1学期（6月・Time 1）でも2学期（11月・Time 2）でも親和型学級になっている場合は肯定優位型（HL）が多く、学級集団の状態像とグループタイプは関連していることが明らかになった。かたさ型学級は2学期に肯定優位型（HL）の出現率が低いなど、児童の友人グループの関係性も不振であることが明らかになった。ゆるみ型学級は1学期は肯定優位型（HL）が多く、否定優位型（LH）が少ないという学級の良好な側面が顕著であったが、2学期になるとそれが消失してしまうことが明らかになった。荒れ始め型学級では1学期は様々なグループタイプが出現しているのに対し、2学期では否定優位型（LH）の出現率が高まり、学級状態の不良さと児童の友人グループ関係の不良さが相互に関連していることが明らかになった。

中学校の6月（Time 1）の時点で、親和型学級には、肯定優位型（HL）の出現率が高く、否定優位型（LH）の出現率が低いことが明らかになった。また、ゆるみ型学級には否定優位型（LH）の出現率が高く、肯定優位型（HL）の出現率が少ないことが明らかになった。さらに、荒れ始め型学級には否定優位型（LH）の出現率が高いことが明らかになった。11月（Time 2）では、親和型学級には肯定優位型（HL）の出現率が高く、否定優位型（LH）の出現率が低いことが明らかになった。また、かたさ型学級には、消極型（LL）の出現率が高く、ゆるみ型学級には否定優位型（LH）の出現率が高く、荒れ始め型学級には否定優位型（LH）の出現率が高いことが明らかになった。

したがって、中学校においても小学校と同様に1学期（6月・Time 1）でも2学期（11月・Time 2）でも親和型学級になっている場合は肯定優位型（HL）が多く、学級集団の状態像とグループタイプは関連していることが明らかになった。かたさ型学級は2学期に消極型（LL）の出現率が増加するなど、生徒の友人

グループの関係性が希薄になることが明らかになった。さらに、ゆるみ型学級も否定優位型（LH）が多くなり、トラブルを抱えている生徒が多く出現することが明らかになった。荒れ始め型学級では1学期、2学期ともに否定優位型（LH）の出現率が高く、小学校同様に学級状態の不良さと生徒の友人グループ関係の不良さが相互に関連していることが明らかになった。

4. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、小中学校における1学期（6月・Time 1）と2学期（11月・Time 2）の学級類型とグループタイプとの関係を検討し、学級集団の状態像と友人グループ関係とは相互に関連していることを明らかにした。よって、教育的効果の高い学級集団の状態像とその学級に所属している児童生徒の友人グループタイプには関連があることから、教師が目指すべき学級集団の様相および友人グループの育成の視点がより明確になったと考えられる。

ただし、これらの関連の背景にある児童生徒の心性については明らかにならなかった。今後の課題としての。

【引用文献】

- 藤田 英典・伊藤 茂樹・坂口 里佳 (1996). 小・中学校の友人関係とアイデンティティに関する研究—全国9都県での質問紙調査の結果より— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 36, 105-127.
- 河村 茂雄 (2010). 日本の学級集団と学級経営 図書文化社
- 河村 茂雄・武蔵 由佳 (2008a). 学級集団の状態といじめの発生についての考察 教育カウンセリング研究, 2, 1-7.
- 河村 茂雄・武蔵 由佳 (2008b). 一学級の児童生徒数と児童生徒の学力・学級生活満足度との関係 教育カウンセリング研究, 2, 8-15.
- 河村 茂雄・田上不二夫 (1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, 30, 112-120.
- 幸本 香奈 (2009). 中学生のグループ関係 生涯発達心

- 心理学研究, 1, 84-93.
- 厚生労働省 (2009). 平成 21 年度 全国家庭児童調査結果の概要
- 黒川 雅幸・吉田 俊和 (2006). 個人—集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足度に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 45, 111-121.
- 黒川 雅幸・吉田 俊和 (2009). 仲間の存在と個人の集団透過性が学習班活動に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 49, 45-57.
- 文部科学省 (2001). 「不登校に関する実態調査」(平成五年度不登校生徒追跡調査報告書) について 初等中等教育局児童生徒課 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20010912001/t20010912001.html
- 文部科学省 (2013). 「不登校に関する実態調査」～平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～ (概要版) 初等中等教育局児童生徒課 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1349956.htm
- 武蔵 由佳・河村茂雄 (2015). 小・中学生のグループ状態認知尺度の作成：グループに所属する理由および被侵害との関連の検討 カウンセリング研究, 48, 133-146.
- 中谷 素之 (2002). 児童の社会的責任目標と友人関係、学業達成の関連—友人関係を媒介とした動機づけプロセスの検討— 性格心理学研究, 10, 110-111.
- 武内 清 (1993). 友達関係教育と情報, 422, 10-15.
- 全国連合小学校長会 (2006). 学級経営上の諸問題に関する現状と具体的対応の調査 (2017 年 10 月 12 日受稿 2017 年 12 月 10 日受理)

Characteristics of elementary –middle school children’s classroom groups and their relations to peer group types: changes of classroom group types and those of peer group types

Yuka Musashi (Morioka University)

Shigeo Kawamura (Waseda University)

The purpose of the study was to survey relations between children’s cognition of their peer groups and their classroom groups. The researcher compared frequency of perceived peer group types at Time 1 (the first term of the year: social relations among classmates are growing) to Time 2 (the second term: continuing classroom activities and school events have molded characteristics of each classroom group). The participants were the 6th grade pupils of 6 public schools (N=1261) and junior high school students (N=1083) of 4 public schools. Results were consistent regardless of age groups or timings; classroom groups that were conductive had a significantly greater number of peer groups that were positive dominant both in the first and second terms. On the other hand, stressful classroom groups had more negative dominant peer groups in the second term. Thus, characteristics of classroom groups and types of peer groups were mutually related.

KeyWords: peer group, classroom groups, elementary school students, junior high school students